# 私学の魂

成蹊中学・高等学校

## 小学校から大学までがワンキャンパスに集結。自然と設備に恵まれた環境の中で、専門の教員が知的好奇心を刺激する成蹊教育。その価値は社会に出てからじわじわ効いてくる。さあ、世界に通用する“個性”を磨こう!

**成蹊といえば、これまでも政財界をはじめ、法曹、学術・芸術、芸能・マスコミなど、幅広いジャンルに著名な人材を輩出してきた伝統校として知られています。良家に選ばれてきた理由は、学園全体で共有する教育理念が大きいからでしょう。**

**司馬遷の「史記」の一節、「桃李不言 下自成蹊」(桃李ものいはざれども、下おのづから蹊を成す)から名づけた校名を学園の理想とし、「徳のある人には、その徳を慕って人々が集まる」、そのような人創りこそ成蹊教育の核であるという考え方が100余年にわたり受け継がれてきました。**

**「個性の尊重」「品性の陶冶」「勤労の実践」を建学の精神として掲げ、協働や体験を重視し、互いに個性を認め合う環境の中で、確かな教養と豊かな人間性を育み、社会の発展のために貢献できる人材を育成する成蹊中学。「私たちが目を向けているのは常に社会。成蹊での学びが身につけば、グローバル社会でも活躍できる力が十分に備わるはず」と力強く語る跡部清校長に、グローバル化が加速する国際社会に向けた成蹊独自の教育について伺いました。**

校長　跡部清先生

### 子どもたちが巣立っていく10～15年後の社会に、十分な対応力を備える学校

社会が大きく変わることが予想される、これからの時代を生きる子どもたちにとって、ふさわしい教育とはどのような教育なのか。そのような観点で学校をフォーカスすると、成蹊の教育風土に注目が集まります。

創立以来、「自らの可能性を拓き、蹊を成す」という理想に向けて、今でいうアクティブ・ラーニングのような、思考を活性化する学習方法を積極的に取り入れ、自ら課題を発見し解決できる力や、自分とは異なる個性を受け入れることができるキャパシティを育んできた学校と言えるでしょう。

「全国に先駆けて国際学級を設立したのは1935(昭和10)年のこと。国際理解教育にも伝統があり、現在もさまざまな文化を吸収して帰国する生徒を受け入れ、常にクラスの中でお互いが刺激を与える環境を保持しています。こうした恵まれた教育環境の中で、私たちは『グローバルに認知される教養と個性』『協調性のある自立精神と自律的行動力』『知的好奇心と科学的探究心』を教育ビジョンに掲げ、解答のない社会においても、多角的な視点から物事の本質を見極め、多様な価値観の中で責任ある選択ができる人材の育成に力を注いでいます」

そう語る跡部清校長は、教育ビジョンの実現に向けて4つの柱を打ち出しています。

成蹊は中高一貫教育においても約90年に及ぶ歴史

「帰国生英語特設クラス」ではハイレベルな英語授業を展開。帰国生の存在は一般生にも良い刺激となっています。

## 【4 つの柱①】
## 学力の向上と全人教育
## 中高一貫教育の強みを最大限に発揮する

をもつスペシャリスト。卒業後も自学自習により成長していけるよう、学ぶことの楽しさや、学び方を習得させる土壌があり、独自の学習環境を創り上げています。その一つが学習や生活の習慣づけです。

「自分でやるべきことを整理し、管理できる力が身につくように、『日進月歩』と名づけたスケジュール管理帳を活用しています。ホームルームでの確認事項だけでなく、定期テストの対策や反省等も記入でき、担任との面談でも振り返りの記録として役立っています」と跡部校長。

中 1 から国語、社会、数学、理科で分野別の授業を実施するのには、生徒の興味関心を引き出す目的があります。「例えば理科は、生物・物理・化学・地学に分けて授業を行っています。高校生のように、どの授業も専門の教員が担当しますので、好奇心のタネをたくさん蒔くことができます。タネを拾った生徒に、科目のおもしろみをより深く伝えられるのも専門の教員だからこそ。そこに授業細分化のメリットがあると考えています」（跡部校長）実験・実習・芸術分野の学習活動にも力を注ぎ、考える力や自分で課題を発見し解決する力、表現する力などを育んでいます。「本校には主要科目という概念がありません。言い換えれば『生徒が興味をもち、もっと学びたいと思った科目が、その子にとっての主要科目』という考え方が根づいているからです。生徒はどの教科においても知的好奇心や科学的探究心をくすぐられながら、基礎学力をしっかり身につけるとともに、幅広い学習の中から自分の主要科目を見つけて、将来を切り拓く力にしています」（跡部校長）

「実験実習重視」を掲げる成蹊では理科設備が充実!はく製や標本の数々にも「本物志向」がうかがえます。

### 実技科目がおもしろい！すべて一からが成蹊の流儀　トピック

技術で箱を作る時は、定規と紙を渡して製図から始める。書道では墨を摺ることから始める。音楽では経験の有無にかかわらずギター演奏に取り組む。実技科目は「すべて一から」が成蹊の流儀。

家庭科 ( 高 2/ 選択授業 ) では、キャンパス内で調達できる食材を使って調理実習を行っています。担当の坂井史子先生に食材を尋ねると「梅、タケノコ、銀杏、夏みかん、山椒、木の芽…」。それだけでいかに自然が豊かなキャンパスか、想像がつきます。パンやケーキを作ったり、産地から取り寄せた魚をさばいたりすることもあるそうです。これも成蹊ならではの魅力と言えるでしょう。

広大なグラウンドと緑豊かなキャンパスは同校の自慢！それぞれが教育に生かされています。

人創りにおいても、生徒の主体的なかかわりを尊重しています。

「文化祭、体育祭では実行委員が縦型の組織をつくり、すべてのパートを動かします。いろいろな人がいること、いろいろな考え方があることを理解し合いながら、一つのものを創り上げていく体験は、国際社会で求められる幅広いものの見方につながるため、学習でも行事でも大切にしています」と跡部校長。

学校説明会で行うキャンパスツアーも、生徒の提案により生徒主体で行っています。「生徒会の中学入試

文化祭は生徒自ら企画から準備までを担当。自主性を育む絶好の機会となっています。

を経て入学した生徒たちが、『受験生の時に、在校生と触れ合いたかった』と言うのです。私たちには学校説明会に生徒を参加させるという発想がなかったので、生徒会の生徒と担当教諭との間でよく話し合い、実施する方向で一般生徒に呼びかけると、中高合わせて約 50 名が集まりました。その子たちがグループを作り学校案内をしてくれたのですが、実にいきいきと大役を果たしてくれて、実施してよかったと思いました」（跡部校長）

## 【4 つの柱②】進学実績の向上 一人ひとりが望む多様な進路に対応

成蹊では、進路別によるクラス編成は行わず、高 2、3 になっても、クラスは文系・理系が混ざったクラス編成です。ただ高 2 では週 7 時間、高 3 では週 17 時間、各進路に応じた授業を実施しています。「進路別によるクラス編成を行えば、教育の効率が上がり、結果も出しやすいと思いますが、それは少し違うというのが本校の考えです。在校中に人脈の基盤を作ってあげることも私たち教員の仕事。社会人になってクラス会を開いた時に、お医者さんもいれば芸術家もいる。弁護士も教員も研究者も経営者も…というように、いろいろな分野で活躍する仲間がいたほうが心強いですし、生き方においても刺激を受けることが多いと思います。私も本校の卒業生ですが、いい仲間との出会いが財産になっています。本校の進学実績を見る際も、どれだけ多彩な進路が実現できているかを見ていただければ」と跡部校長は言います。

「現在、成蹊大学に進学する割合は 25%前後。難関大学をめざす生徒もたくさんいますし、海外の大学に進学する生徒も珍しくありません。交換留学を行っているアメリカのセントポールズ校への留学生は、帰国せずにハーバード大学やプリンストン大学などに進み、各界で活躍しています。生徒はそうした先輩の姿を目の当たりにしているので、自分の行きたい道に進むことに躊躇がありません」（跡部校長）

生徒の学びを最優先に考えたキャンパス内には機能的な設備が充実（写真は化学の階段教室）

## 【4 つの柱③】グローバル教育の推進 学園全体で国際性を養うことに注力

国際社会を見据えた教育が求められる時代に、成蹊の大きな強みとなっているのが国際理解教育。学園全体がグローバル教育の推進を掲げている背景には、前述のとおり、戦前から国際学級を設立し、帰国生を受け入れてきた実績があります。「戦時中は一旦クローズしましたが、戦争が終わると多くの人に求められて再開しました。1964 年に国際特別学級 (1995 年に国際学級に改称 ) を設置して以来、日本と異なる教育環境で育った帰国生の受け入れを行っています（一般入試に帰国生枠も開設）。国際学級入試で入学した生徒は日本の教育環境に慣れるため、中 1 時のみ国際学級で過ごし、中 2 から一般クラスに合流します。その理由は、帰国生が非常にいい刺激を与えてくれるからです。彼らと関わることで、『こんな発想があったのか』と驚かされます。生徒の視野を広げるには欠

ケンブリッジ大学での短期留学プログラム。世界屈指の名門校で異国文化を学びます。

オーストラリア・カウラ高校の生徒たちが成蹊を訪問。国際色豊かなキャンパスライフが展開されています。

かせない存在なのです」（跡部校長）

また成蹊には交換留学生や、海外の学校からの訪問者も多く、デンマークのルンステッド高校や韓国の光新高校、2016 年度はアメリカのフィリップス・エクセター・アカデミー校の学期生５名を受け入れました。クラスやクラブで一緒に活動する等、触れ合う機会があり、海外に出なくても国際交流のチャンスが豊富なのも成蹊ならでは。もちろん留学プログラムも充実しています。なかには奨学金が給付されるものもあり、今年度は長・短期合わせて 82 名が貴重な体験を積んでいるそうです。

「長期留学の行き先としては､アメリカのセントポールズ校、オーストラリアのカウラ高校、さらに今年度からアメリカのチョート･ローズマリー･ホール校（Ｊ・Ｆ・ケネディをはじめ、多くの人材を輩出した名門プレップスクール）も加わりました。短期留学ではイギリスのケンブリッジ大学、アメリカのカリフォルニア大学などとも交流があります。また国内における国際教育プログラムとしては、中１の希望者を対象に、２日間にわたり英語づけの生活を体験する『イングリッシュ・シャワープログラム』や、高校生を対象に、学内で５日間、英語力を鍛える『エンパワーメントプログラム』も実施しています」（跡部校長）

さらに中学校の行事には、落語を聞く、歌舞伎を知るなど、日本文化の理解を目的とした行事も組み込まれており、バランスのとれた環境の中で国際感覚を磨くことができます。中２では卒業生の東儀秀樹さんが毎年雅楽の体験授業を実施。生徒は雅楽器に触れたり、音を出したり、時にはセッションまでできることもあって、それが非常にいい経験になっているそうです。「いまや日本で暮らしていても、いろいろな価値観をもった人たちと仕事をする機会があります。今の生徒たちには、異なる価値観を受け入れることが必要不可欠です。これからは語学はもちろん、仕事では専門性が求められるでしょうし、日本の歴史や文化を理解しようとする姿勢も必要になると考えています」（跡部校長）

## 【4 つの柱④】
## 学びの変化への対応
## 大学入試改革に向けての対策も万全

2020 年を目処に、大学入試センター試験に代わる新テストの導入が検討されています。予定どおりなら、現在の中２生から大学入試制度が変わります。成蹊ではその対策として「学びの変化への対応チーム」を立ち上げ、精力的に活動しています。「情報が錯綜しているため、私たちが情報をいち早くキャッチし、生徒や保護者の不安を払拭していきたいと考え、新たに組織することになりました。メンバーはさまざまな視点から議論できるように、いろいろな分掌から選出し、週１回、会議を行っています。その結果をもとに対策を議論しています」と跡部校長は言います。

大学入試改革では、思考力、判断力、表現力がこれまで以上に問われることは明らか。同校の中学入試問題には以前から、読ませたり、書かせたりする問題が多く、その点でも、その対応力には大きな期待を抱かずにはいられません。なぜなら「入試問題」は学校の授業スタイルを反映する鏡であり、学校側はそういう力のあるお子さんを求めているからです。「成蹊でしっかり学べば、今から大学入試に向けた対策を考えなくても対応できる力は十分につくと考えています。安心して中学校での学習や生活を楽しんでください」と跡部校長。ぜひ広大な成蹊のキャンパスに足を運び、豊かな自然の中でのびのびと中高生活を送る生徒の様子を体感してください。

運動系・文化系ともに多彩なクラブ活動が充実し、中学生はほとんどの生徒が参加しています。